

「前の試験で、良いデータがとれたからいいものを用意したんだ。これだよ」

「オナホールというものだね。この割れ目を見てほしい。どこかで見た形だろうか？」

「色に形、そしてぬかるみ具合まで、私の女性器に似せて用意したよ……ここは、興奮をささうために、あえて、お・ま・ん・こ、と呼ぶべきか、私のあそここの形、そっくりに作ったオナホだ」

「しかも電動で内ヒダが最高にいやらしく絡みついてくる仕様だ」

「くつくく、大丈夫。今日は寸止め検査ではないから思う存分、射精してくれたまえ」

「勃起も充分のようだね。では、早速、試験を開始しよう」

「ふむ、問題なく挿入できているね。感触はどうだい？ くつくく、その表情は、バイタル値を見るまでもなさそうだね。これなら、前回同様よい結果が出せそうだ」

「では、動かしていくぞ……くつくく、まだ一番弱い振動なのだが、もう数値も上がってきているね。このままオナホを上下させて、オチンポをしごいていくとどうなるかな」

「抵抗は無駄だよ。数値は順調に記録できてるからね」

「ローションの分泌も最適だろ、ふふふ、こんなことをして何になるかだつて？ それはキミが知つても意味はないことだよ」

「ゴム越しとは違って、ナマのぬるつきがオチンポの隅々にまで、伝わってきてるだろうか？ 汗気も、柔らかさも、そして吸いつきも、全て再現してあるから、私だと思つて、腰を振つて精子を出すことだけ考えてくれたまえ」

「そらつ、君の好きだった、女のおまんこだ。入り口の締め付け具合も、ヒダがカリを舐める感触も、子宮口まで突き入れたときの弾力も再現してるのだよ」

「んふふつ、もう射精しそうかな？」

「今日は寸止めはなしだから盛大に出したまえ。おや、あと数%で射精しそうなバイタル値だがまだ抵抗するのかね」

「だったら、振動を最大にして。思い切り上下に動かして、オチンポをズチユズチユ、扱きまくつてあげよう」

「遠慮はいらない。このまま中に出してくれて構わないよ……いいぞ、いいぞ。限界まで数値が上がってきた、射精、射精、射精……あきらめてオナホにせーしをぶちまけたまえ」

「んふふつ、いい射精ぶりだ。オナホの外にまで、濃い精液が溢れて、扱いていた私の手まで濡れてしまつたね」

「取れたデータも、素晴らしい値だ」

「もちろん、オナホでの搾精テストは終わらないからね」

「再勃起モードに切り替えて、一度出してしまった男性器の硬さを、ふふふ、体は正直だね、これでもとに戻った」……先ほどと同じプログラムでオナホを動かしていくよ」

「大丈夫、キミならこれくらいでこたれるようなことにはならないよ」

「うん、腰を振って自分で動いてもらってもいいのだよ。遠慮することはない」

「空っぽになっても、玉袋で新しくザーメンを作ればいい」

「いいぞ、いいぞ。私の研究のために、新鮮な精液を供給しつづけたまえ。くっくくく」

「さすがに五回も出すと、量が減ってくるか」

「射精に対して作る量が追いついていないようだ……ふうむ、残念だ。ただ安易に増精剤を使った試験を行う前に、他の手法も試してみるとするか」

「そうだな、次はパイズリというものを試してみよう。人間のオスは哺乳類のサガか、事のほか乳房に興味を示すからな」

「ラバースーツの前を開けて、んんん、そらっ、私の乳房、おっぱいだ、じっくりと見ていいよ」

「爆乳と言っているサイズだからね。こうして目の前で揉むだけで、男を興奮させたり、油断させられる、まったく女の体というのは便利だよ、くっくく」

「オナホのローションと精子が混じった匂い。これならパイズリ用に新しく準備する必要もなさそうだな」

「んん……おっぱいを近づけただけで硬さが勃起時まで回復したぞ。ふふふ」

「正義の味方なのに悪の組織のおっぱいで固くなってしまおう正直な勃起オチンポをおっぱいで挟んで、んん、しっかりと谷間でホールドして、このまま上下に扱いていこうか」

「ふふふ、熱くて硬い感触が胸元に直接当たって、これも悪くないな。観察対象を間近で見ることができる。鬼頭がびくびくとなかなか可愛いな」

「さて、このまま試験を続けていこう」

「んん、くふっ、すりすり、すりり……乳房が硬く張ったエラに絡んで、もう出そうなのか。パイズリは想定以上に効果が高いな」

「ああ、もちろん我慢する必要はないよ。んんん、悪の組織のおっぱいに負けて射精、しても全然かまわないよ。それが今回の目的なのだから……気持ちよく、どびゅってくれたまえ♡」

「んんんんん、なかなかの射精量だね」

「ああ、はっ……顔にまで掛かってしまったが、悪くない結果だ」

「んじゅるっ、うん、濃度も充分だね。パイズリは物理的な刺激よりも、精神的な刺激で男性器を興奮させるよあつたね」

「ふむ、その目線……では次は足を試してみるか」

「足コキというのもあるのだらう。ふふふ、キミが私を見るときにそういう目で見たことがあるのが、おっぱいと足の先だったのは知ってるよ」

「遠慮はいらない、大丈夫、キミは射精することだけを考えておけばいいのだよ」

「それでは、ラバースーツの足先で、まずは竿を撫でてあげてやろう」

「根元から、先端へ。加減はこれくらいかい？ もうちよつと強いほうがいい？ ふふふ、どんどん硬くなつてくのがわかるよ。私のおっぱいで挟まれたときよりも、反応がいいじゃないか。おもしろいね、感触はどうだい？」

「バイタルの値はなかなか高い数値をだしてるよ」

「こういうふうには女性に足でふまれて喜ぶ男性をマゾというのだよ。知ってたかな？ ああ、もともと男性としての尊厳が大きい人間のほうが女性の下位として扱われることで落差が大きくなるのでマゾとしての快感も大きいものが得られるそうだね」

「正義の味方であったキミが悪の組織の女博士である私にふまれるというのはとてもとてもいい刺激になるようだ」

「おや、もつと強く踏んであげてもいいかな。こういうふうには……くっくく、更に硬くなってきたね。私のおっぱいで挟まれたときよりも良い数値が出ている」

「こう、足で上下に刺激を与えてあげるのもいいようだね。隠しても無駄だよ、数値に全部現れているからね……もう出そうなのかい？」

「マゾプレイが気に入ってくれてよかったよ。うむ、気にせずどんどん射精したまえ……ふっ、ふっ、ふっ……それっー」

「んんっ、出てる、出てるぞ。パイズリの時よりも、すごい量だねえ」

「皆に頼られる正義のヒーローくんが、足責めでザーメンお漏らしする下変態に堕ちる……ふふふ。この方向での言葉による刺激もなかなか効果的だね。また硬くなってきたよ」

「そうだな、今度は素足での反応を見るとするか」

「少しラバーで蒸れているが、それが嗜好な男性も少なくはないと出てるからな」

「足先の指を広げて、竿を挟みこんで、んんっ、このままカリの敏感なところを、ゆっくりし……いていくとどうなるかな……んっ……ラバー越したとわからなかったキミのオチンポの温度、鼓動が感じられて、ふっ……おもしろいな」

「ヌルヌルで重心がかけつらいが、こう、むぎゅつと踏んであげると……良い反応だ。もう取り繕う余裕もなさそうだね」

「ビクビク先っぽ震えて、もう射精しそうなのかな。時間も惜しいので、しこしこ足コキの速度を上げてあげよう……あんんっ……素足だから精液の熱さもわかって面白いデータだ」

「私の足の指にうごんのように飛び散った精子。常人ならもう水みたいに薄い精液になっているはずの回数なのに、やはり、キミの精液タンクとしての素質は高いな」

「では、そろそろ本番に移ろうか」

「ん？ 決まってるだろう。今回はキミの精子生産能力を確認するための試験で、今までは効果的に精子を出させる、射精させるための刺激を確認するための項目。本番は実際に連続してどれだけの精子を生産できるかを確かめるのさ」

「大丈夫、キミ用に特注した増精剤もある」

「うん、これで問題なく精液を生産できるはずだ」

「くっくく、効果が出るのもなかなかの速さだろう。もうこんなにガチガチだ。せつかくだから、キミの一番のお気に入り足コキでそのまま続行してあげよう」

「いいぞ、いいぞ。先程とは比べ物にならない量、濃度、品質の射精だ」

「んふふっ、データを記録したから続けようか」

「精液でぬるぬるでちよう間違えたら足が滑ってしまいそうだな。だが、思いつき体重をかけてもいい刺激になっているようだ」

「はあ、はあ、はあっ……自ら腰を振り始めたね。うん、うん、問題ないよ」

「キミは気持ちよくなること、刺激を受けて精子を生産することだけ考えておけばいいんだ」

「うむ、このマゾプレイは試験データとしてまとめておおう……もうキミの周りに大きな水たまり。精子溜まりができているね。ああ、きちんと量は記録してるから気にしなくていいよ」

「このデータできちんとキミの精液を回収できる搾精器を作つてあげよう」

「くっくく、今は私の足の刺激を楽しみますえ」

「びゅっびゅっびゅっびゅ、マゾ精液生成器は楽しいだろう。なんにも考えず、腰を動かしてオチンポで快楽に流されて、ああ、きつと優秀な精液タンクになるよ。キミは」

「よし、データは全部取れたか。やはり、女性の生足で男性器を強くふまれたときが一番いいデータを出しているな。おやおや、足を離したのにまだびくびくっ精子吹き出して、もう、ヒーローの面影はどこにもなくなってしまうたね。大丈夫、私がキミを立派な精液タンクに改造してあげるから。くっくく」